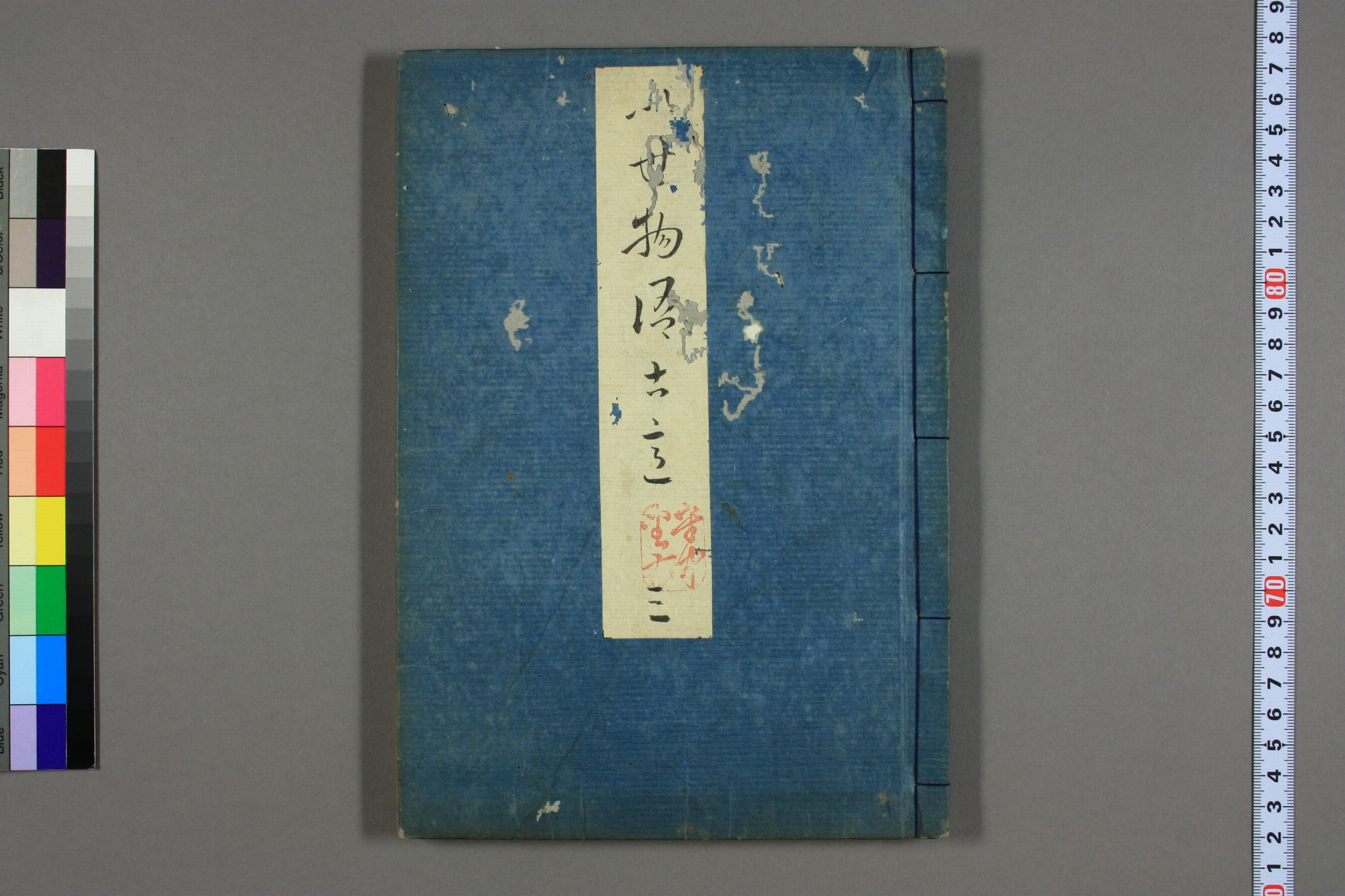
物語古言

和名抄の比まてハ仮
字もいましくを作くて
作つかるをさおし
ほよりや私ゆるし江次
第ニ於ケリ結菓を
かく縄と書し縄ハな
ハの俗字にてこの菓
子乃かるゝあらす
異く無こ書くれを
漱のしゝ無いうなきや
むほくとも物あわり
こゆらんこれハ字の巧
のこゝかゝりて法沫
の仮字のことなるをハ
思ひしるやたゝ沫と云
て流ふほふをうし
こゝ沫あれ物ゆ云う
うえ氷あれるむほくる
細まれハこゝかゝ氷
の法しらてつゝ氷
てこゝりのむほくる氷
ハ難さらん万葉なり
歩音あれと皆あわと
書てるれ西しきかし
万えうふ玉のさてかく
糸なりよりて結をよわと
こゝかゝ時に意さらめ
やもとあるハ結の切て

糸もて結ぶ故にあるを結と云名ハ玉と思へるまてあやまりしなり
今を糸を用うれど沫結こゝふハむほびうつれ名のこゝなる
いとのりぞなきハ和名抄ハ結菓形如結緒此乃みてく和
名かゝ久孫阿和とあるハ此度くぐ抱乃かゝれ彼あるを結と云
むほび結りけるきハいふまるハち阿和の仮字もいまし
まてゝかもぞあ来葉まり水の沫とあ和結のるをハ
阿和ふ書合てあハほと書いましへあるふゝあはそとを
玉とはいひしるなしこれをもて思ひ分べし又こハ沫しき
むすび物まてこけやまは抱とおもふもあやまりし
阿れしきと阿わと仮字実なきハ又後世あれび結び
こゝふ名を此ある結の名後あやまれるまやあらんけて、玉
あれびむすびてふふくいまし玉の結の場をも結びつらん
とおぼゆきれどなくを仮字もあやまりこれどいまし

玉れ乱るゝをいたん物を
まうけて行結らひて
り玉をもうこ糸れ結して
まとまれとたらんとおりつやとらつることまのとりましし

むらのし姫とおわほきめるなんめりかゝとひごとしたる女り
あはでふるほのるしなんめりハなるありを音仮まていふ
谷さゞこ寄すでたへるをかづうた近んと人り故思なくり
せざよ谷ゑこちて姫ゑ寄までたひのぼきる着ハ知けどえ
しゆる世をうすじよ姫とくていつにも人ゑ殺すじまを志
ひてくいへるものくこハ菓葉り谷をバこ寄ゑたひてるをうづ
らうこ近んのんあもはなくりてふをかうへて又谷をばこ
寄べりたつ法玉着はへてしあらぞ年ゑこそてもてふを
こ重てふこうり場ゑ男の知さしくこめを忘きめるなん
めりと書るをよくくらきて見るべし
昔をとこいろごのこちする女りあくりけるこしろめぐらや

毛詩周南云葛之覃
兮旋于中谷彼葉萋
女羅本細草抽莖信
不切憑高出岑上假樹
入雲中

おもひくん

あさしろみちえ乏しれぬより起きて何事にも手なれあつ
らちまひてうかもしまをうらし給ぬかしとぞ

あまらで下紐とく孔ありしが此ゆかの花のさかりの花とハありとも
ものなどを難をあまとて人しハほとおもしくいうろ
ひやほよきらふ清輔朝臣の説なる混本歌とてあとさかを
乃つ歌としてげあやほき花のきざして下の詞を取り
此歌安信の清ら朝臣のよめるといへるが正しくハ之を取
て作るなるべし○花の紐とくといへるハ六帖にもみえて
おもひ出きてもくるむる春のるり花の下紐いかにとくらん

かくし

ふりつてもほどびし紐をひとりしてあひ見るまでハとかじとぞ思ふ
これハ万葉に二人して結びし紐を一人して我ハとき見じ

ただりあはさでハてふをうらくかへて返しときりんでると
まし

(うりとハ吾許(アガリ)妹許(イモガリ)など あえうるとそあまくとかすよし)

むかし紀の有常の妹にいまでおろくきけばよくてやり
ける
(たもかくり今ハ又紀のありつねがりつきてるにありけてあろく きけるよぶよくてやりけるとぞ)
もとて古本も今本も昔の下に男をありときりなくて八理り
も侍るてのくりけて今年の詞ハ昔此男み見ぐつ給ひて
いまうありまて方くありまて年て家に帰りし
きまでてふまでハかくれて下ハ待るをびてあやらましてあるの所
へよりてやりけるといふ言のや詞程のあしめくとも
字のかぶれしちるべし古本にまで有事の様へ給ひしを
をいたらさそ理りあまりけし○物よほどとく年を経ま
ていひとみともろれと名をあげでいふるく物よりると
に物てなどもみれ同じくちぶ久るくらく

うゐのかうしハ朝臣
めでたき心のい
とひろきまなりてある
めのみありけりの中
にて紛をうちきまと
とくくちの恋の心を
ハゆめありぬ

君ならでおもひならひぬ世の中ハ人をうらみをや恋といふらん
ちなそ業平朝臣のよめらん恋の歌なるらうつくしてかへるいろ
ごみとなるらん男ありて恋てかへ物まで まゐらせさりし さか
りしありしけるがもとのまへ業平朝臣いけるをそく恋しふ
物きあひみねば恋れかるを身が苦しさてかきやいひくるらん

かへし

なるいねで世の人ごとに何きをも恋としいふらんひとしき身しも
身しを恋て身ならいはずこそ身にやそ人ごとあり田つくすあさ律るび
思ふ身をなしくたちで打あひ知ぐるとしらせしまて呼すぐ
久沢春の作りしるし
むかし西院(さいゐん)のみかどすなりしとかど おはしましけりそのみこの
のうちなり 宗子(そうし)と申す 淳和(そうわ)院なり
淳和天皇西院におはしまししより せざるがいかれとてつくしも

十すらむかし淳和院(ジユンナヰン)ともそいひけり 西院ハ四条乃小西大宮の東とそ り故ハ橘の太后此所にあらし
○宗子内親王とてうみ帝乃皇女也母ハ橘氏しらのくミ子ハ兼
和十五年五月十五日にうせかりすてしま 続日本後紀ニ見ゆ
そのみこうちでさてひで葬(おんはうり)乃夜そのみ家乃となりなる
なる男はうてみりそんとて女ぐるまそりおのりて出てあるけれ
葬り乃る車ハあやのしかやすやうにはしも昔よりあらでくにも今なり
さ式侍ちりてらゆ秋主におちきど法(おんおくりもの)勝御まて一位の贈(ぞう)
と来羽の走るさまバ方相(ほうさう)ろきろめ幡鉦鼓大角小角を
おきさくのるのありめぐ

此法葬送の式法を監
護する官人は
後日本後紀にみゆ

いとひさしき将(ゐ)て出でてまつゝぞ打歎(ちはげ)きてやらめぐらり
けるあひづまり
轜車(キシヤ)を将(ひき)て将(カ)て出るごいとおろまを待るびつ鄰(となり)ゑそ
いつの人そらんずてうへらんとおもるあひづるとし

嗚呼ト長息スルをあげ
きくてめでたるを又略シ
テきすこてもいつりぐくハ居ニテ長息スル也悲歎とおもへるなるらし

向示文車立利 其者源至与云 あまの志られ久ごのこなり
ひめこれ車を女猫れくるほと思ひてこかくまさめくあひ
ぶりかの伊こる常紙とりてなかり入りけまぞ
今年ハ女車と見て取あまど路におまてといへるをてら
して女一人のとあるぞよき
車なり久ほ人この御こるれ炊火にや物似ち思ひて滅なんと
すとて男のよめほ
車れ内にハこもし火をおくでこゝぞさいて思ひこるあらちなれ
ハ此常を燒火のあくよろにやうむいで常の火を久ちな
んといふし常紙ちらひやしんてかを久ちなんといへるまそ上
りこもし火といへるよりうつきる語のこ○今年にハおこるれ
こもに火にやこゆらんとみてそわろりよ吉年の子にぐこうまる
をいふりうや志うまさんに網のころもにてハ物しうまさ

又こゝにそ上紙うけてくろちなんとみてこゝろ又なれ今年に
ハこゝろも燒久ちなんとまるほ法にてなし
出ていなまぞかぶりなるべし炊米年へぬるかとなくこ御をきけ
こそ葬車を挽出てゆゑバ是ぞ室女の此世れ限るべし身
の火焚て殺りこゝろも影へてまふものうかく弱くお
ハほるをと人くの哭音をきけとなさめく至に示ほ
なり此て常紙炊火といふまりして如焔盡燈滅てふ仏の
入滅の語にとりなして燒米といひ見ひさしう待るび
てあげくを逢歴ぬること法にろくてるなど仏の御者
の命にてかさねくむつかしく法さし
となんかへしたりけるあ米れしの久ごのこれ家にて
真ぶなり久ほ
吉年に真ぶありくるとまるにこの直ハ多ぐてふそと

今年二かよりなるべき
又なるべきとみてけるし
吉年二可ぬとおこれハ
こゝハなるべしといひ切く
し又三の句吉年ハ
炊米とありこも吉年
ろてとりあるし
○新しの家れ志くの類
うつきくてこゝろあされ
ると此御者の家志くへ
たくこそけひくくるむ
つしすと甚となるる
なるを此御者ハうく様
のんをいひてもつしまを
餘情あるとおほしかるを
や又ハ元ものさまあるを
これかゝるこゝろあ申かれ

かくさとりあやうの所を
出して御てたつぬこのよ
めるとしようまうを取て
ハうつりて かこの前のよあ
ると云ふなと此文の書
まて云ふひ下るまも
てあれ をまつ候

にて此こゝ人ハいろぬこのさくに似ぎれ事をさとれる人
のおれさくさうあるとこゝろ下れ名ごのこゝろが却てうくよ
めるなあやとさる文也○直を多ごとこゝろハ上にあるは人と云
またぐ人の言情於深氏などれ物語にあるはもあらぬとりふもで
言ひしずてふこゝろあるなれ○次に分ぎてり 玉ハ順ぐが 祖ひ文
まわこゝ子乃あこなしてふ詞あり 既にいつるぬくこゝ書
を後に表りまつらわるが中にもさていとく後の人れ出
かくしものしし所に古本にハなし凡の書に古紙とするにハ
ちうませ文まて今ある人を引ものあるぬを此文に順をしも
いこの傳 業ん○こゝ子乃あこゝちなしとて業ぐが父定卿ハこの
内親王のいとこなきバ玉れかゝ海べりしぬるすと後の人れおも
へるしされとこそ皆ゝ出ぬ書に出ぐ所ぞさる説ひふべき相
なしぬ此物ぐり乃こゝ書きしてまるゝこゝ書れ

むかくわうまをとこけ志うそあらぬ女をおもひ分り猿の流
母あるとて思ひもぐ法くとて此女をおへ追やらんとすさこゝろいへぬ
まぐおひやしぞ

古本に追捨とあるハおひ
すてんとすともうむへ
し今ぞ二志うひて志
はしくおひやらんとよ
むのこゝろ云ふまちく
○戸令の云ふ凡一戸の
中可人多く住る事戸
主或ハ親族ハ良民とて
よろしきりのくせ戸を
仕ひて其奴婢をハ縁と
いひて其ゝりこゝろ
つまれるものくし又家
人と云ハ奴の中よりえ
らこゝあけて戸内のす
をさしむきハおよろし
たれとうも於やうこの
教也
○万葉ゆこ上総国の東
ふ所の玉ふてふお女ハ
分ゆしくてひとすし
麻衣をのこ笑てあれ
と縁あやまつらまるい
ちひむすめよりとこと
に光出ぐりとうめるう
めくあるへしこれし
あやしのもれまて
あやしうハあしぬ也

こそいまし人の民戸のさうさまて侍り此女そ其戸の縁なるに加
かうちれよく性しうハあしぬをうの戸主れ男子がおもへるし
其の法代の制まて良と賤と奸まそ棄よりて母のおもへら
くあ子此女りふかくなりなるぞすべなるべしとてはやく
よりふかりけるをバ志しでけがらに女相あへおもんとすれ
○けしうハあしぬれけハ万葉に殊勇ボの字をもちゐてあれ
志くことあるをいふ所に古本の性しうとも書ひて縁ハ猿
まれて其人のさうにこゝろれバあやしれ縁といふ程ぞバ
けしうそ何しぬとそ其人の程なるをいふをこゝそいや
志すがあやしうれしぬほどなきバ其人に勝ましし

[illegible]

○はらからハ兄弟の情を結ぶなれバはらからし八義禮も陰陽の道を
ある事にて西施とも何事かとくさくらする事をかくさうし
ぬりする事を依り様のごとくにするに事と同じ○母の字ハ
いづくにても女はふとすべしまでも女の行ふべきなり
で母れとりあつかひなきものなし○はらからハまづおもひやりを
こそいたさしろしてまづ親にいましつとそ戸ばれをみのの回
ど戸めしの浮くるなれバ家のゆハ兄弟ハにつくくもある
なり恐れてんと餘ほどんきを待べし又はかるあそびず
いやさはりよ増るをいそん料とも詳れりさきるんるの文
の網ハかくのごとくなれける

人乃子なる者ハでらむるいまはひなし

人みなより男ともかくのめぬ新めさやうの男とありて母と
縁めの事ハ她るなるにそ上にゆづまりまづ主なくで

[illegible]

わかはりどの事なるまで母かはおかよ勢ひなきよし
女もいかし久しきまで撲力なし
男れまづいかにひかまより第して女もとなりさて此女らの
家は侍つる縁の女なきまで出さじみとまづふべからちてくるまで
しよる性しらハあしらめとひとろに縁しとのけるるてこその擬
ちりしのも○はらからをまもり撲力を失しハはかまひをとる
人そそのびりり偽されどおもはまくる家ありすべひとらふ
なきまで近よるを出さじよとすべけんも縁の回じ久しきずく
けるあひあつりおもひそいやさけり久しき
上りまつ追捨ずてかりはりしきけんる母をバ此網の
女るのめて嘗りけて浮る切るるれるなきらそん料よかくあり
辛あり此女を侍ひり近様男無此後きなくがきど待るよし
かなし将て出んと去れバ男なくしよめる

あまりにいたく涙とたえハ
侍るに式部卿の宮のまへ
すて聞えれけるに殊に泣
しきみの本をさゝふ
ハ引こ人々まよひ出て
出りちゞに思ひぢの泪
とめかねてたゞちま
はらわたちぎらんとて
血のおなじ古語にち
はちくとて千代のなみ
ともゆかしおもて且郭
ある血を吐とかいふを
彼ハ熟字にてロわする
同じ字それハ吟るところ
肉のきけて血の出る
れふし血の涙ハ韓非子の卞和か事につけていへるのゆくえれ家にもおほくよりけて此所にこゝろまよひに
血は涸なくてハなひきさんやうもなきをもちあげ人ハ泣てしにけむとぞし

あれどもいはでおもひてあるゆゑやうらみつらみもいはず
きそでもかゝりおひやるまゝハ宣り男のしたしきゆへなきを
漸ありし侍しまゝなる文ハひとをおもひ○逐つゐにその上ハ詞もな
く血をもて書しつゝ将かあるとも人しれずこゝにてなげかせ出
さはる今その時きいふ○血の涙ハ涙つきて血をいだすとい
へり出しこゝを掃あつかふなさをし

はらわた
腸ちぎる後の字もちぎるむかしもありしにてき涙なしかなしみて
涙のあまり床にたふるゝかたちの事かの身の上にてなげき給ふハ悲
てふをみてかなしひなるをあはれみてそのあひだにいひかはりつゝ思ふ
を添りしわのこれハ身をしたひきこえしめとおもふなる
みまかりてかなしとし

此うた六帖にはなりいかと
あるうたにかへる所
ようけんにきれまして
拾遺にハいつ時いとく
とかうるまさるへん又ハ
作のいさゝか但古歌の
業平てに此ハ人の加
へるもハあしくろいの
て此郭下のかなしさらん

女ぞいひけるであとより　つけて

女すでにあとをおひてゆきけれども男のあとにしたひゆくに
はてはそのみちのくまに伏て
いづくまでおくりハしたひし人ともしらぬわかれのなみだ川まで
かくしてひたすらはかなきハ何ともしらでやまぬかと
る所ハ涙にまみれてえあはずなりにけりをあはれにかなしく
と人めにかゝらぬとひとりごちつゝ○あはれなる所にて
ゆくすゑの身のはかなさいふべくもあらで此の女あはれ
いはけなくて下の其のつけて清水の所にて六帖
まいらせて何の家にてとあり後撰拾遺の集の同
じくいとひていとあれバ此うたありしときてよめる今昔に
出てゆけどもえハ追ひつかで清水のあるところにしてなく侍
らざりし後ておもひのまゝ今昔ハあはれなる事もあるべし
けりとかやしハあはれなり

三
十

は人ハいとひて
出てゆけいとなほして
より此の詞も云もかつ
ことろうてすゆうも
なけきハ一向うむつ
うしとおもひて此年
もしらるれなるべし
はの人のさりしらする
事すべての事なり
なし

いとひてハこれ
厭而者誰別之難 云云
女出而往者迹不付而 一本迹を返ふ あゆされり
何所至而 云云

かくあり一本に此出而往者の四字落ちたれバ又の一本以
て侍へ書るへしりけるを後の人あゆさりて此の四字を厭
而者てふ字の此人よきて書しを又此人上の女此追
出されし詞をおもひて此うの如何をぞ見もきぞ
きて出てゆきバてふぶより変みてとおもひていとひてハ
の詞を弃てきたく侍に書るおてゆきバをす法
しるものしたり此る極めてうらぶひなけきバ今うの
ごとく書つらねたり。返此字を迹をあゆさきてと
ぬくさぶかなきぞなほしつ女出ていまバ詞をつまて
とみつて男此又よめるこの理りも云を悲しこれ

とよみて多くも沒めきバ母あきてまけりなほざりにおもひて
こういひしらぶいとかくしもあらじとおもふにくたらん入てきバ
まどひて郭てたる

一通りこと

云所しのしたれいとひてきてふ一首まて殆いらんハおし
あうぬくちす女の出てゆく迹ひ男の徑てけるぞう又
ふるみて殆ひたるとみてぶよかしぞや。なほざりまてふ
語そ直をおきてしいうまぶなきぞ直て凡人をなほ
人てふ恋の此く世の解のるをいふしきさらをけりといふハ
はを略よみをまて通ききて云し殆きバろの物ふの
くおもひも入をおけるんぶさ殆なほざりとまいふし人ハ
はさむと云うれ
うらうてんはくし

凡ふの日沒ぢかりよまてうたへて又此日乃岩皆るなん
からうじていよいでしりけるむりしのわうこどまかく

等閑の字をよむも志
うり此略ハ即須先
の文した方の方をいふ
又ハ先はより起れり

すける物思ひをなんしけるいさの世の翁（すき）事を死なん
や時はそやよひの法ぐもりなりけ
此昔の云くより詞を翁てふほどまて忘すべき
まてあらしほど翁（ひとうど）人といへるは蚤（むう）つてつくいふしさ法
事文のいまはひがうし。さけまてふ語のおまふ所いとお
そし係し。時ハ云くの詞を本にあさきを法より語をお
もひえぞそし殆ぬ人なりし日の永まほどをおもハするか
物うんがふべし
むかし女ちらから二人ありけり主とりハいやしき男のまづし
きをとりハ富（あて）貴なるをとおもちかりけりいやしきをとこ
そこ法女志ちほの つぐもりに袍（ふんのまぬ）をあらひてみづから張（はり）
けりこころざしハ勤（ひとり）々れどまづきるわざもなくはざり
々まづ衣（きぬ）の袂（すと）をはり破（やり）てぬりせんかもなくて

ぬぐなまりなきなり
きぬの法ちりなど若そきなくまてけるべき従（ずさ）ちるなど
にきさほるなるをこハ身しまて妻のこゝろは
まるもまりよろしき人なれば法るわざなきぞ
れどもこころざしハよく通りて志けるゞ所ゆきちきるも
年極る日をもいふて明（あす）の元日の料なきバ家に
せんすべもなく切（きち）るをいたんこゝあれ。上にゆつりて
こゝにハこゝぐきぬ乃袂とあらぐよ（今ぞ人のまぬと云ハつゝなし）
又袂を張やりてるとみてそ似つかはし（今ぞ人の所とあきハいつゝなりや）。やり
てまやかりての略也。袍ハ和名抄に袍（ふ倍の）（ぬ）一名朝服著襴之（スリツケノ）
裕衣（アハセノキヌ）也。志ちほハ年ちつるてふ語を上下略して語とつ
を通はしてこゝしと荷田（かぶの）大人（うし）の義へらましハたゞしきなり
けり（古本二師馳とまちこゝろハ伝のかりまちなるを語世此文字に
つゝて解を下すハ家国のたゞしを翁くるにあらに）

めぐでのりしに志ばし事有てゆくのねバ今ハ古くろあ
多しんまやなりはてつらん程ハ先てこゝろゆくのあて
ふくことより前に志ゝのよりこてやまてゝゆくひたあらふ
こゝならんとおぼしまし程後ハ万葉にゝゆきひとよあり
むかし契沼(りや)のことゝ程王(ふこ)清(おすしまし)屋にあり
契沼親王ハ桓武太皇の皇子にて齋衡二年に三ふ
より二ふ志ゝさへり 文徳実録 ゆ
こゝみこ女をおぼしていとかしこく恵(めぐ)こつかよひ給ふる
を一人に寂(いとなさめまて)聶而家のことおもひ給ふを一人に又人やつけて
文やるとて霍云(かくぐす)のかゝつ給ふまて一人に
おもそ一人乃女にこ人通ふにもじめの親王のさゝしと
東の人ハ明しくしし才なる一人ハ様を語をもふ
きしゝのバ言ゝに又ゆえがつ給ふ様にまで今ハ其ハなさめ

かしこくハめてこゝ
ゆくあはすこゝ
相していふ説
ゝ多ゆ

嘯ハ字注二私罵将言
嘯嚅まゝ言若不出
口といへりこゝにハ言にハ
いまて類をふくむ方に
かりしなるんかゝきゝ

きて乃下にあたるをてふ詞をうへて女のなさめくるときし
にや此詞古本になしあてハいよくこゝわりなまを好年の体のわざ
なるんあるし古本にあり倍てなもふりこの中ハ男ハ体人のかよふを
志しで家のことおもふ故に類を答ふてかりしのて通ふを云な
説さて家(いと)てふ語のよりし詞を略(ハぶ)るハこの上下とおなじくよそハ文
法なまとてのるれ又説文あるにやともおぼゆされど抱ての言
ハ志るなれぞ古はどしいふし○又人やつけてとまこのひとゝ
今初めてやつけるとも此て詞とぞ強がまてさかゝへにあ
もまてやりしなるん
詞とぞ泊ゝの嘯(を)にのあさふ所ハ程ことなきあれもふ抱ふ
こハ古今集の夜れ家まて多ぐ新公れ人のこゝるをこゝにか
く揚るを作りて人にあるにハ此る女まことゝ入り来の句ハ
おもひ志ゝさきなぐしさぐく詠さるとよあり○秋撰

成都記云杜宇亦曰杜主自天而降教人務農帝好稼穡至今男人將農者必先祀杜主格物論曰杜鵑三四月夜鳴達旦田家候其鳴而農事可興

○又曰杜鵑鳴則農事興

○又曰杜鵑鳴則蠶事興

○又曰杜鵑鳴則蠶麥熟

○又曰杜鵑鳴則蠶麥老

○又曰杜鵑鳴則蠶麥收

○又曰杜鵑鳴則蠶麥畢

○又曰杜鵑鳴則蠶麥盡

○又曰杜鵑鳴則蠶麥賤

○又曰杜鵑鳴則蠶麥貴

○又曰杜鵑鳴則蠶麥賣

○又曰杜鵑鳴則蠶麥買

○又曰杜鵑鳴則蠶麥種

○又曰杜鵑鳴則蠶麥耕

○又曰杜鵑鳴則蠶麥耘

○又曰杜鵑鳴則蠶麥刈

○又曰杜鵑鳴則蠶麥穫

○又曰杜鵑鳴則蠶麥舂

○又曰杜鵑鳴則蠶麥食

○又曰杜鵑鳴則蠶麥飽

○又曰杜鵑鳴則蠶麥餓

○又曰杜鵑鳴則蠶麥死

○又曰杜鵑鳴則蠶麥生

○又曰杜鵑鳴則蠶麥長

○又曰杜鵑鳴則蠶麥短

○又曰杜鵑鳴則蠶麥高

○又曰杜鵑鳴則蠶麥低

○又曰杜鵑鳴則蠶麥大

○又曰杜鵑鳴則蠶麥小

○又曰杜鵑鳴則蠶麥多

○又曰杜鵑鳴則蠶麥少

○又曰杜鵑鳴則蠶麥有

○又曰杜鵑鳴則蠶麥無

○又曰杜鵑鳴則蠶麥來

○又曰杜鵑鳴則蠶麥去

○又曰杜鵑鳴則蠶麥歸

○又曰杜鵑鳴則蠶麥出

○又曰杜鵑鳴則蠶麥入

○又曰杜鵑鳴則蠶麥上

○又曰杜鵑鳴則蠶麥下

○又曰杜鵑鳴則蠶麥左

○又曰杜鵑鳴則蠶麥右

○又曰杜鵑鳴則蠶麥前

○又曰杜鵑鳴則蠶麥後

○又曰杜鵑鳴則蠶麥中

○又曰杜鵑鳴則蠶麥外

○又曰杜鵑鳴則蠶麥內

○又曰杜鵑鳴則蠶麥東

○又曰杜鵑鳴則蠶麥西

○又曰杜鵑鳴則蠶麥南

○又曰杜鵑鳴則蠶麥北

○又曰杜鵑鳴則蠶麥中

○又曰杜鵑鳴則蠶麥外

○又曰杜鵑鳴則蠶麥內

○又曰杜鵑鳴則蠶麥東

○又曰杜鵑鳴則蠶麥西

○又曰杜鵑鳴則蠶麥南

○又曰杜鵑鳴則蠶麥北

はせて　京よりおほやけの使などくだし人を出の[illegible]の富あきらめて[illegible]
て租税をうけし書などをもて出の富をさしかためあがたを班田のことしきてそ法を立て班田使をつかはして
六年ごとに一度國じうの田地を改めて人ごとにさづけ給
よりおもてに名ありさて使は國府にとゞまりて其年
たち民ごとに國府を指て縣をわけ又一郡をさだむる所
も作り立かうかくして田品をさため戸の多少によりて田を配分くる
いはゆる田地あれば[illegible]かならずわかちて[illegible]
まで[illegible]て同じくわかちあたへ[illegible]
乃ちこれ郡をかなへて引き[illegible]の[illegible]
多くはこれ家ごとに戸主をたてゝ[illegible]
戸母ともいひて戸は一つの戸なれども[illegible]

班田乃法ハ戸令をもとゝして[illegible]又郡の内ニ庄といふあり[illegible]六年[illegible]ハ方よりあたへ[illegible]

[illegible]世の略傳も[illegible]戸自ハ老女の[illegible]中比の[illegible]坂上の戸主の[illegible]

やじといひて一戸の内をしらさどりて婦女のおもむき[illegible]
ハ妻を家刀自としてうしろみせしなりされバいへどじなるをとうじ
といふハあるじのつまのことにて刀自の字をかりて書くなりさて刀自をあてゝ
いふ体なり

後世乃人家童子と書るハ論語ニ邦君之妻君稱之曰夫人夫人自稱曰小童といへるを皇朝の古意をしらずにとりたるなり家

女乃はうざくなんどかゝる人もありてかならずしも女のみがいひつけたるにあらず
ふじ孫をもかぞへて家の長とし[illegible]
なんどくみするハ[illegible]家の刀自もおのづから[illegible]
衣裳のこしハ所謂ひきおびしたるべし[illegible]
とみえたる物を借もちて[illegible]絹の[illegible]
男女が名をとめずつまびらかならず喪なく[illegible]つきてつな

ヿ家子のとじ[illegible]戸の家主[illegible]又いひなしてとなれり[illegible]後世の人[illegible]韓國より来[illegible]刀自といふ也[illegible]

[illegible]男の[illegible]女の[illegible]

上のいふて神仕のさすをよめるお前を得をかへて用ゐられハうれにつまて記者の紹れ也

乃さす紹よろしり上れハ君これ言ひしよりて有り人ハ
この起をきぞ寝もきでよる紹あかしていてふ前のころ詞
を右れ二首にわたりて此うつをバ記者のよろしりとも元由。な
ぶめとまていつもいふがめくうまひある時のるし
むかしをとこいとうるはしき友あり乃至
日本紀ニ善友をうるはしまとも云ふあり（こをまりひられ友作こといふハ志ひうる説也）
かたとまはさしぼらひおもひ乃るを人の面へいまゝ乃るを
いとあはれとおもひてわかまりけ至
古本にハ行時より前れにありまでの詞ハなくて得不去詠に
清にけりとあり是ハおほゆけの使任などにて此を云べし
されど今の本のさすをこそあしうるハ那にハいと云
べきあり下に海ふべし
同日へてやりたるみ可清さしうえくひめきで同日のへぬる

事（なしてこゝハ句也）ふてきて
何さすしハ憎さしく人を深めをぞむまを家身のいひ
ぶひなまをくぞむまも皆ひやり蒙てふ事ハさすれをぞ
ましげなれバあざらと云がめく何とをく者を通ひして
いふしき本に清様と書たるハ訓をかりたるなり
さまりとのこゝろふ
をいとしくよくん人ハさを得ましされとやすれぬ人れやまくしと云
ものとまくとてもあるまん本の得るを志りて志はらくすくてとまふるうらひのまうまる
七代にしふ也
十段也や志らすひたんといふくおもひまぶべて侍るよの中
乃人ぞんそめがるれぞまほ此ぬべきあるこゝろ是れと云
ぞ（やり）しられバ（今の本にハよくてやると侍りしあるなりし）
めがるともおもひなくに思しるし時しなけ也ハ面新りしり
同ぐるれバ即おもひまほるし世のなくひなどいひおこを殺へ
どあるを者に三也さねらほるひさもちまゆらに面うけを
清とうひて見さなし世侍るしされバ同ぐるしともおもひぞ

今本にうまれハあさすしくこゝろより下ハ方の方よりの文の例也
いあさすしこゝろ清浄世ハ清きんてふくすとおくりさてハかうまぬるまし
身をうぞましきこゝろとはなれハあさのさを
こゝろへまを切るにハあさまりとのこゝろふ
りすまていひまれたりすくしくよくん人ハさを得ましされとやすれぬ人れやまくしと云
をいとしくとてもあるまん本の得るを志りて志はらくすくてとまふるうらひのまうまる
七代にしふ也

此めるれハより下ハ高ちるを今本にハあやさるまらん浄下りいふし

今あるまれハこの言ハ
むかしの男れし

とりへり

たまたまうつ今あまつまていへり然るこの詞どもの根こそ一人れ男乃女とえんも嫌ひなし遣有とて一所ゆでうれも事なりてハおくさきりともよめどおくまて上る昔男とていひくらべしうきてぞうきやりつるけりとよむうへ語の勢ひありて世間依て思ふ世の中てふよりハ昔の男ぞやりつるかなるべし

あり古本乃むらをたり恐ぐ

昔男家華美友在けれ得ふ去語ふ往けれ陰精火歴而出ふ女ふ淺猿得ふ得ふ前日之雅爲事ふ

ふ雅ふ隨会佳名付

世間之人心波同雖若可ふ物ふ祛ふ礼

ふ言出有けれ者

同雖雖以思時ふ無表面新ふ立

かくする時ハ後答のうへしふくのくふうすへ考ふん人ふしうすへ

むかし男ゆんごろにいかゆ侍と思ふ女在けりされど此をとこを他し

とゆて新強ふまさりつくいへりける

こハ古くまこある女れ業まれ事をあさづめ侍ありまほと思ひてよこてつゆしけるとて此二首ふ今ハ強ふをうつて一条ときるのこ出て此ぞうりまてハ男いかで逢へてしがるとおもごろに忘るし○あづとハ他の字を書より訓て他し人にんのうけろふを略してあづしとのこそいへりうまへ雅ぞして揃花白露などにしてあづしさきに忘るさきにおもふ

大幣ぬきひくまあさしに加ぬきハ思へどえらうたのまざりけれ

祓の大ぬきハ人所さしあつまりてまふ引抽なるまこの男ハおもふてうおほくてかうくへ忘るまとへり

返しをとこ

古夏記仲哀天皇の條二国乃大奴佐以て祓せしめ天武紀二諸国の国造を召て幣を頒ちたまふ御大幣と志るされしハ公のぬさ所ゆるに大ぬさといへり此事うよめるハ大の語れそこにとし

裏の字古本二ニ云ふ
もよそこり

なめくしハ熟ゝ雅ゝて人れ弦だんるをぞ思ふと云くされど
それもふハ惜を思ふし○むほだんとも日本紀に約の字
をよこしてるがぬく契りむほぶを当むほびよろへり
かへし 今本ひかへしの上にとゝかへしありとあり 古本こゝろまをよしとは
初葉れなるがめづらしきことの葉ぞうしなく柄をおもひ乃るの れ
本にハちぶもかくめづらしのにおもひ物のけぬ詞ハそうぞとくがめ
て来にハ日やわらぶて〻海あひぶまそしき年ろてふ
んをおのぞ云てぶるなる物思ひよとりふし○初葉ハ若く
さし葉葉に新葉れめづらしんも又わの葉れやしめ
づらしま西大葉のもなぐよめり○うしなくてふ詞そんれ
葉に清しむるまくおもふがさしに云をいへり万葉につる
ばと乃ひらへ衣れうしをなくみ読子友意ゝて海のもうら
もなく家は葉にまた柄のもりて云ハ柄もひつしも○この

男ハ聚志にあらぬ妹を貴て人にむけべしとよめりと云説
ハ此返しのなぞめづらしまこの葉ぞてふ詞にも叶ハぞ源氏
の何ぞ思ふも 女一の宮へ 宮のさかりすぎて 妹にしきんをし
つる所の人れむけバんをひひこるを見ていのぐおぼけらんすし
をくさかりていしへの人ハさるべき同どハ為ぞてなくなるけし
侍り乃出と志のびてゆゑしさへバ云云かしもれ論する人と思ひ
ゆゑましかどおほけに思ひぞてて 若葉れ物見ん柄とおもを
たほどむほぶ出するにちろけ出 女一ノ宮 てしもころあれ阿中しと
おぼきバ柄ものつりハぞとわりてうしなく柄をといひする姫
兵をざれてまくおぼさる○独衣にも中将の兵さし妹の源氏
の宮を意ゝふ所りし此殊ともを見きてさへバ左右中将の日記
をぞいとめでこゝ書こるしりとこるにあひなり智行ぞ語
なるこゝちして目とぐさ海にしおほのるまえしのびこゝそでこハ

おしぬへそこゝ云ハさし
しよ兄妹にてもあらぬと
いふ言也
五葉に出と妹のをりしまを
見て出付侍りの系侍
葉 中ゝ川よりの川ハ
あきまくんいもの山を
こゝてこゝろへまけるしハ
置ち物中の女とあれハ
これも妹を意しまゝ
ちまゝ妹ちらんハ俗を
持て志しるされと志れ
今ハいもの山れ中に
おつるてふ所れ詞をとり
で志しくも他りさすも
天房なとの比れ方と見
えて俗ゝ物中の比の方
にハあらぬ是ゝさつむら
ゆゑりなき詞につくれる
を言としてとりしなる
しもとよりなるむらの
ちしめ志しるれとこゝろ
引人あれハ思て明すのゝ

○年ごろ　おくりこし
八代のをそこうつつ　ねぶと
ころ　ハ好ひとり　ち五
日作とてつるハ　ち五
てくあやかれるち又
しみ日記ハ　ある
やとらふ人ち作れと
子のうたけうのつを
添はうあてうをこ
うけてさくこれ
ハ多のねうしめを
○或人四条後とてもお
こふんの昔からやや
こ答ひ世かくるのる
をちくくふ時そ
ハ後もそっありつく
九行のもろの作る
つくるをくろくる
こ皇ハそハ二神の
みその八ひより
みてさるふとそれ
こ図盈ハそしめそれ
玉垂ハこすまつのあり
しかくこハこの下いやき
うえくに学ろそは玉の
添すしの多つれ
ハ人原のさくく割ハ
おくてあるう世るれ
あてろうん、のか
う玉こハ図盈をすう

いてぐ出後ぎるとて作しまをさ勢ふまくよし
さくバ昔の秋をくくうろ
うろのおくうろ中の玉
妹のあて玉をそしるきち
る事をちるより作て見いまく妹まるて右衛門
ちくくる
てふくくもひとさそ比姫玉のこしきれをな
らそくおぼすとひ独夜うをけきをうけてまて
妹と当るなどもそ玉乃いうへのくひをおく
斗るものし排皇多のいうへ回盈まるハ右るる
飛あるる中紀などよまるをり玉ふまるでしほをもてわのひ
ふくしなれバそぎりしるまくへ人まするほよ作をハ人
はるべのくで玉のいうへ人まするほよ作をハ人
情をくさんたるるハ作てわくくも中くり作ハ話

聖くすろつるをやうく亟姉ナの人くろ
おのがれさくハまる
りくるそくろ仇刀と
こハよくしけるほられと空く月ろ人ハちろしそれハろちを
ちくくとれとまの下ハ即ち能のくりうくろうくるくく
ほるハ人のめうそ云おろれとくろくく老ル人ハおま
二人あうんも盆ちるなくし抱ハちろ物ろうて
ろハうひ作くをほるまのくるろうてふ人多一元
るをうろくめそハさるろうひの玄をもさくとりあこハあ
つむりしさくりを叩母のさすそいるくへの斗ち
から人のくるのをひくる作れハおきをうれを
いひもすちよとおろっちろのしけくりをおもろる
ち多ち男ひと
斗ろ人あうく
こハけちくろ
ち仝他の作り
きらふのを

むくのしをちこ生けりうくも。
互うち老もるし

ろの子的十づてをハこぬと古男そぬ人を称ちふそみの心
さそ古帳くろれ子を十ハこあそち男いぬ人を行る
あ日ちんと左別のくそ十で玉をかしうて用ねくり卵を
百をかさあるるハ朱ぐてよ称こちらもしろハさある
わぐあそもきべてを思こぬ人をこるハ行れ

説苑云晋霊公造九層、
墓云着息闇之上、
召求見云臣能累
十二博棊定志意以
棊子一置下加九雛子
其上云云

たのめもかひもなけれバ おもはじ このめじとし 鶯子
をうさぬるさとへハ かゝら玉よみしをとれるまや 情情日記
に 名をしてをれ子をナのさしてするのあり たれ子を思へる
このさらでも 諸よいふものありてきしれ○又六帖に同じ 女則女
をもなきてよめるとて 漉つきり 浮草れ 松そとめりとも人の
ふをいかで 多のまん

こいひ乃きたゞ女

和歌ハきたゞのこりても 有ぬべし 後の此世をゑのこたりべま
たゞまゝ 和の歌れ夕かけて 消をぬもあらバ みたまんをあぐ人
をぞいかで 形こそつべきとし 此世をこのむとハすべて男女の
うれくゝ 夫婦と成て 語るをいへ 此バ こゝそ夫婦の有れ世れ
このさぞとこそし○此 和歌ハてふ 所ハ 續於遺系の哀傷の部
をとられ 六帖などの 所なる 和用から 出しなるべし 私 此ハ

をとして世のたゞなるなり 此よくこゝる所なるを 出いれ 此ハ 詞を
かへなどして 出れ あらくらべ とまをしる 後 此のよりとらハ 意をへつし
イナシ ヨロシキカ
みしの 通しを 此こと

吹風りさぐ 此様ハ 春ぞとも 何 雨これそのこひとれ こゝ 後ハ
出て六帖りちらぼして 吉良の様ハ ありつとも人れ 今をいかゞた
のかしんとて 其系 此とも 其の所なるを 例のね しかて 此こゝを
をり○何 雅とも 事の切なる時よいふ まげまの 雅し

又女反し

此 和りし 歌 かくよりそもつまよハ 思ひぬ人をおもふなり 書を
こハ 古今 集 意りしへるをこ 用 わたり 第 集 の 名のうへ
歌 かくぬ よ 家いのち 妹りし あはんとうたひつるのもてふより 出
たりこ 涅槃經 ねんぎり 是身無常念 不住 猶雷光暴水 幻炎亦如
畫水 隨畫隨合 こふ 此てよめり

白氏文集云 縦旧年花
残 捐待 后春 雑賴 是
人心 ことを 同じ 此
家をきこしぬとし 此
なれハよそうつたる
らんけ 可 待 ちうつ
業 年のとして 入るゝ
いてうり うや

三

二五

み男

ゆくみとるる数ゝ数花やろ

[illegible] けみ男てふより孚かけてもて男のそこみそうハあの
[illegible] 三首我あげて詠をるのみそもてうふ人わるるそゝ・あ
[illegible] そろそもいへる伝え五そ
うん或人ハ仕そふるをやそ人のんをにうるるをもそて於
[illegible] おものみもくるるとといふ
[illegible] らみこにころある生そうに是いつぶ

化(か)ろ〳〵五(ご)り志久るをとこ女のおひありませしるうぐし
[illegible] 五(ご)よ人をあぐんそうへうをもてぐそうぐ紀あみうを
[illegible] 他のあく強そう
[illegible] ゝ中なるをもしまそて
[illegible] うかそそうにつゝも於
[illegible] 化のをを刃のうハ俗

[illegible] この細をうてしぐをそのしそし

昔をとこ人のあれ(なむ)ま絶うほ久るを見て

[illegible] ありそ印かしくうぐ
[illegible] 優(やさ)しき秋(あき)ぞ時(とき)や作(つく)のさ統(すぢ)
[illegible] 一度こにうし教ハ世ゝ秋のらぐん時そまゝ紀れる
[illegible] 世しをの玉ハ年ごろ
[illegible] 物名部作を於をじそ
[illegible] ろく捨てしくろをもう
[illegible] ろく学ぶ教下ハよろ
[illegible] 捨ぐそこのうハ等生
[illegible] 多久れぐそこるまで今花
[illegible] 第時てけ
[illegible] 行ひもそん浦女

業平家集とて今ある八代集ともあつめて書る物ならゆれとものぞかれぬ人うつしつる物八ともあるを入てかきつけちらしれハいてさるへし

桂のうち八うちあてこれ以後明ちりの後世うつして上八いる信ハあやまりしとて上八いる信しきりつけまちれ

きこえへし後世さらにまきれいほりふともおもひめりけて今の世まうへしう唐ハちあまとてハうつして唐ハさあ中古の行るるの古今に逕く桂女と書る集ともあるらもうつしう唐ハあるまても初へし　古今の今あるをうへしうへハともなきへた論り桂のうちハうあり乙るをもうへともあ中古りたりとうきしおもしさてきちうへしうへハとあやまりてありてあるへハ桂しよ上ハのうちもまともへまちる仮名もいうりの仮名をもかろうらぬりつくしよすまれハ○花くろうちくめを万集ハ末のことかなりて出来あそひて上あそてなきと論あハもらし万葉ろく語え他にとて不わかまを八向ひ是れまてしらむ落きさしき花青をふりくる後撰集あ、夜九ことりくそきえよりそうはまもなのさらまつまやさを念すこちる世の中のやハ味も俗しとも云おそふれさその神をし離騒に朝飲木蘭之墜露夕餐秋菊之落英なといふ花とらへハらるあとりふうくとせもくのしぬいうくへのんるる雅にハ書しこことむはなのひけくたへなるを是を俗情まてそうしいてつ出らてまて

むかし男なまめく人のもとより粽無尾をおこせたりしかへりことに

かざりちまきを云く書けるハ粽とてありたる糸して粽しめるを申さるのかざりちまきともかひのかさりともそのやうなまめかしうまくし乙菖蒲尾ともなき菊の葉しめとりもかさりちまきとかきたり○おもきまちよき月あるちひらまくかさりちまきを山ちかけのとりのて為ためにあかそんのむをかさりとせ菖蒲の糸をまきまきかさりちかあたるさしのほかまきつはりおもきをハちとをのさ月いつり高まきん

續齋諧記云屈原以五月五日投汨羅而死楚人哀之毎於此日以筒貯米投水祭之漢建武中長沙區回白日忽見一人自称三閭大夫謂回曰聞君常被祭甚善但常年所遺並為蛟竜所竊今若有恵可以練樹葉塞上以五色絲轉縛之此物蛟龍所憚回依其言世人五月五日作粽並帯五色絲及練葉皆汨羅遺風也

しハきりあつる作くみ紫式部トのハいと喜し記者のたまへる事

きみ絶やりつるかなとやうふきそくなれどもおもふさしにてそまし
傍士此記者の比にハかくてかわりて色ゆくめり○起似霞あり
如知義達離宛一の安司金一の絵病静半栄兼る人満媚
狂鶏に又嬌喋はしきちのさうをおもふめり此句にハ
よりて作出る条なるらん

件の作ハ狂の歌ゆ知るに人しらずとてかかさねこそハ今まで事より是れハ伊の宏き作の狂の歌あきもあろうくよめる人ハ君かくそてなからん言出ては狂るを書きとてそうつりてと一首に宏作とそのむとあこハ天そうやるこぞ字にてきよとそうてもころり中くそとる本まきしきや

むかし男つきなかりけるきんなかりいひやりける
いやらぬ夢路を頼むたもとには天つ空なる露やおくらん
これハあてなる人を恋ひて双歌にてまれ狂事物がおもふまいの露
なる人を恋ひて夢路にもおやくらんよ目にはかなくる
袖のぬれてこのそろぬ夢ろしも夢ぞえしらハきくうき
おもいぬかがけるまうるる思ひやる旅そろるを朱やするとふ
夢路りしあまくの天まそこのま詞かてかくハよあるなる
べしすぐてれんそ相聞人ハ夢の見しひそひあふとりへるに家ハ

おもハぬ人をお恋ひしるる夏なれハ我はかうき人のうへ
いひとそて天まてどえゆまくかへてさあまつる床の袂の涙ぬれ
うるまきてい方も知らぬ夢路をたどりの袖にハそうけるも夢つぬ
宗此露の扣くなるらんとよめるし
若そとゑま見むけりおもひつける人のえそしぞすあなての作ろ
おもハぞハあり母ほしめどもとのはれおもふしたどりにあれぞうまするれ
こいうくまりて後ハこき人ハ思ひうちぞそうのや志しのどもふく
いひてしこのあきげみみまくして我をひかまそそこハ旅の
詞まつまていふをまきをどのこしおうゆかなるぬくちほめり然
ハらせうをしきて宗みなそまけしの詞を加へそるるやろみもといハに
あふとハなつよらとぞのつまき人のう人をまうるうそまうらん
むかしおとこありけるを旅寝思ひあくれて
今あるかうてわかひおきて思ひくあくりてうろもなそさるを

遍昭の哥　思ハあれてあるれいくそのなるれやうそうそうもれ

をととぎすて打もきて（ママ）
ほも海（ざん）の雨でおもひく俤（おもかげ）をいふてあれてくる
もれおそうんなどゝハ男のこゝろをふまそうそうすから
こゝろもむくにかの魚船（漁船）のあるを歌の聖（ひじり）もん
やうそもそしるを思ハするみしり。ちや雲集ハもれて
ともでし今そうあつてきまづ一ほうつりて
そてつよ（ママ）ハまるそうバちをつみぐまをそくハあとまそうそ
おどものこゝろをうそうそうバ
荒（すさ）けりあ（ママ）ま家代の屋つ（やづ）敷（しき）人（ひと）のわれ（わざ）をもて
こゝろんそハりそしれも　こゝろお今そうわど人（ひと）れ仕（つか）ふまる者のさうそうもあるこゝろどもれ申（まを）す
人のこゝろをもて方のあれこゝろ（ママ）　つくるを取用（とりもち）ゐてこゝに此住（すま）ひれ男（を）びてすきてこゝろ方
なこゝろりいふしあるじのこゝろれこゝろをひらめるる前（まへ）こゝろ
ほそう。屋つ（やづ）敷（しき）とお常（つね）ま書こゝろハ第（だい）巻の次の河と同（おな）じ

生（いき）ほでハ者（もの）ろうやそこゝろあるを知（しる）べしあ今集（こんしふ）そのあ（ママ）ハ前
なる自（おの）ずとあ（ママ）ま（ママ）ゐ（ママ）妓（うかれめ）の人（ひと）の書（かき）人（ひと）ゝゝろ（ママ）ろん
こゝろそ此（この）ま（ママ）ま雲（くも）集（しふ）来（きた）れ（ママ）ゐ（ママ）命（いのち）ありくる也（なり）ハこの柏（かしは）もの
兼（かね）生（いき）てあれこゝろ石（いし）ろ（ママ）ま（ママ）ゐ（ママ）ハ配女（くめ）の如（ごと）くなりけを
女（をみな）のをうけて言（こと）う荒（すさ）ま（ママ）ま（ママ）ゐ（ママ）ハ名（な）にそめを若（わか）くお前（まへ）のうま（ママ）ゐ（ママ）ハ
しまハ俤（おもかげ）和（やはら）をあ（ママ）ま（ママ）ゐ（ママ）ハ鬼（おに）ごの如（ごと）えてあるるを彼女（かのをんな）の姿（すがた）そこと
なるべくて言（こと）ゝ誠（まこと）くてくりこハ記（しる）おてくるるしのうまそうきハお
事（こと）記（ふみ）ハ八千矛神（やちほこのかみ）うまそうそ
既（すで）哉（かな）もこほくぎ（ママ）ゐ（ママ）なごゝ（ママ）ろ（ママ）も喘（あへ）ぎる多（おほ）比（ひ）ゝ云（いふ）ゐ（ママ）ろうそう
てゐでそ（ママ）ろ和（やはら）をいくりお年（とし）ハ配女（くめ）ゝ考（かんが）へし神代紀（かみよのき）ろ黄泉醜女（よもつしこめ）
ろそうそうもて彼女（かのをんな）ゝ言（こと）ろ（ママ）ゐ（ママ）ハ醜女（しこめ）を写（うつ）ゝそうをひて言（こと）りのすぐ万葉
ゐ（ママ）ハ多集（おほきあつめ）の二（ふた）ゝ（ママ）ゐ（ママ）ハ出（いで）ゝ（ママ）ま（ママ）ゐ（ママ）ハ写（うつ）ゝそうをひてある
ゐ（ママ）ハ多集（おほきあつめ）の二（ふた）ゝ（ママ）ゐ（ママ）ハ出（いで）ゝ（ママ）ま（ママ）ゐ（ママ）ハ写（うつ）ゝそうをひてある
なるべく（ママ）　或（あるひ）ハ抄（しやう）書（かき）ゝ平（へい）ゝ（ママ）ゐ（ママ）ハ
ゐ（ママ）ハ多集（おほきあつめ）の二（ふた）ゝ（ママ）ゐ（ママ）ハ出（いで）ゝ（ママ）ま（ママ）ゐ（ママ）ハ彼女（かのをんな）取（とり）郷（ごう）